

だから、UD



実践型UD専門講座の学習風景

熊本が進めるユニバーサルデザイン

熊本ではUDに取り組むに当たって、利用者との対話を重ね、誰もが心地よく使えるデザインを目指すなど、そのプロセス(過程)を重視していきます。

第2回 ユニバーサルデザイン(UD)に大切なことってなに!

「実践型UD専門講座」に参加して

崇城大学 芸術学部 デザイン学科 生活環境デザインコース3年 宇野 佑

さまざまな方々と一緒に現場体験を通してUDを考える「実践型UD専門講座」に参加しました。私のグループは、「観光とUD」というテーマで、熊本城を見て歩きました。熊本城をUDの視点で見ると、「車いす利用者専用駐車場が遠い」、「サインが目立たない」などの意見が出されましたが、私は次の意見に疑問を持ちました。「天守閣前広場の砂利は車いす利用者にはつらそう。コンクリートなどでフラットにしたら?」。確かに、車いす利用者の立場から見ると、問題かもしれないですが、果たしてそれでよいのだろうか。

UDというと、障害のある方や高齢の方などを先に思い浮かべがちですが、年齢や性別、障害の有無に関係なくすべての人を

対象とすることが、UDの素晴らしい点です。砂利が舗装されれば、車いす利用者には都合がよいでしょうが、熊本城という歴史的景観を考えると、どうしても疑問です。さまざまな立場から見ると、いろんな問題と直面します。例えば、床の点字ブロックは目の不自由な方には便利ですが、車いす利用者には障害になる場合もあります。だからこそ、対話を重ね、みんなが納得するデザインにたどり着くまで意見を出し合うことが必要なのです。

今回、いろんな方々とお話しをすることができ、UDを考えるには、こういう場こそが大切だと痛感しました。今後の講座の中で、たくさんの方々との対話と体験を通して、UDを広げていく提言をしていきたいと思っています。

高齢者を中心に高い人気を誇るゲートボール。昭和二十二年北海道芽室町の鈴木栄治さんにより、ヨーロッパのクロッケーをヒントに考案されました。しかし戦後の混乱期で精神的にも経済的にもスポーツを楽しむ余裕がなかったことや子どもたちを対象にしたこと、また当時のルールは早くゴールした人が勝ちという単純な個人競技で、面白みに欠けていたことなどから広くは普及しませんでした。「飛躍のきっかけが訪れたのは昭和三十四年のことと、熊本県ゲートボール連合理事長の中嶋利秋



第3回 文部大臣杯 全日本ゲートボール選手権大会



親であることは広く知られた事実なのです。

さんは振り返ります。「熊本県教育委員会主催のスポーツ講習会でゲートボールが紹介されたことがきっかけでした。当時 熊本市体育指導委員協議会の副会長だった上妻一郎さんが特別な体力を必要とせず、ちょっとした場所や用具があれば、性別や年齢を問わず誰でも楽しめることに着目されたのです」。上妻さんが中心となって、熊本市体育指導委員や熊本市教育委員会体育保健課がルールの検討や改変を重ね、普及活動に力を入れました。そうして全国に定着したのが五人一組で行う現在のルールです。「高齢者の方々がゲートボールを始め、めたことで健康になり、病院に通うことも減った」とも聞いています」と中嶋さん。日常で気軽に楽しめるこのスポーツは、こうして高齢者の間に広く浸透していったのです。「ゲートボールは頭脳プレーとチームプレー、どんなに技術があっても、頭を使いながらチーム全員で協力しないと勝てません。奥が深いですね」。



熊本県ゲートボール連合理事長 中嶋 利秋さん

くまもと さきがけ 鬼斗 物語



二十五カ国で愛されるゲートボール、育ての親は熊本です